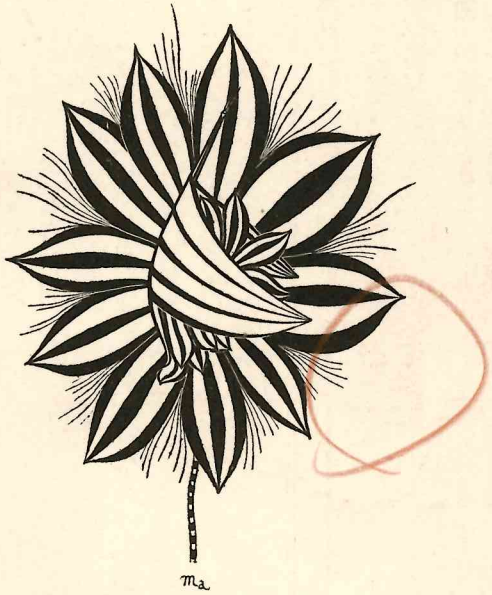
ユリイカ

詩と詩論

萩原朔太郎研究

寺田透　那珂太郎　萩原葉子

未刊長篇詩 虹を追ふ人　萩原朔太郎



5

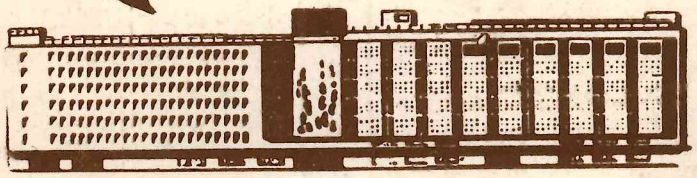
EUREKA MONTHLY REVIEW

日本国有鉄道特別承認第三二九二号
昭和三十一年八月十日第三種郵便物認可
昭和三十三年五月一日発行　毎月一回一日発行

〔第三巻第五号〕　ユリイカ　五月号　一九五八年　五月号　一〇〇円

お買物は

池袋へ西武へ



電車からすぐ売場へ

趣味の街

銀座白牡丹　渋谷九重
銀座花菱　銀座天賞堂
銀座陶桃苑　山王あいみ也
渋谷カワシマ　日本橋さるや
銀座かなめ屋　銀座三共ドラッグストア
銀座写板屋　新橋京花堂
銀座ダイアナ　銀座ミタケ
銀座タニザワ　自由ケ丘白樺
銀座タカゲン　京都志ま亀
銀座田屋　京橋越前屋
銀座ツルヤ　銀座ひさご屋
銀座それいゆの店　銀座すみ屋
虎の門そうげい　横浜元町スミノ
（イロハ順）

木曜定休

池袋
西武

IBM 8909

父・朔太郎の思い出

――おむすび――

萩原葉子

もう、ここ一ケ月も連日飲み歩いて終電で帰ったり、時に帰らない夜もあったりして、父の顔は、疲労ですっかりやつれて黒く澱んでいた。

書斎から急ぎ足に降りて来て、台所で夕方の用意をしている祖母を父は、ふと見ると一瞬ためらうように

「すまないけど、おっかさん又おむすびをたのむよ」

と、遠慮がちに言う。祖母は慌てて濡れた手のまま、廊下に顔を出すと

「また遅く帰る気かい」

と、険しい目で父の痩せた腰に、くちゃくちゃに結んでぶら下っている三尺のあたりに目をやると「しょうがないねえ」と言うふうに、大きな息を一つつく、

「そんなに毎日飲み歩いてばかりいちゃあねえ、それに湯たんぽの火傷の痕だって、まだ癒ってやしないじゃないか」

「自分の身体ぢゃないかね、そう毎日、一体どこへ行くんだね？」

「今夜は寒いから家で飲んだらいいだろう？」

と、嘆息混じりに、ありったけの文句や叱言をぶつぶつ並べ、それでも納戸へ行って外出着を揃え出す。

さんざん、言いたいことだけ言って、

「着物は、いつもので良いんだろうね？」

と、父を呼ぶ

「朔太郎、朔太郎！　おや？　まさか今の間に、もう出て行きやしないだろうね？」と、気がついて、慌ててあちこち行ったり来たり家中を探し始める。

が、どこにも父の姿が無いことが判ると、祖母は

「あきれたねえ！　あんな恰好で、ハンカチや紙も持たずに行ったんだろう」

と、大急ぎに納戸から、羽織、ハンカチ、ちり紙を取出し、気かぬ気性を、まる出しにして、足早に玄関に行くと、

「おや？　下駄が無いじゃないかね」

と、大声で言う、

「でもたしかに、今まで庭下駄が出ておりました」

と、おどおど言う女中の声を後に祖母は、がらっと格子戸を閉めて出て行った。

暫くして帰って来た祖母は、息をはあはあさせ乍ら、さもくやしそうに

「赤い鼻緒の下駄を、ちゃんと履いている朔太郎をそこの曲り角でたしかに見たので、大急ぎで追いかけたけど、とうとう見えなくなってしまったよ」

と、持ったものを力なく畳に落す。

「じゃ、あの赤いぺしゃんこの下駄を、旦那さまが……」

まだ来たばかりの女中は、びっくりしてことばもない。

「出してあれば何だって、おかまいなしさ、だから旦那さまのは、すぐ目につく所に、いつも置いておかなくちゃいけないよ」

と、不機嫌に言って聞かす。

「旦那様って、随分変っていらっしゃるんですね」

と、恐るおそる言ったかと思うと、急に女中は下を向いて笑い出した。

何やらお手洗の前で祖母が大声でまた騒いでいる声がする。

「こんなに悪いのに！　だから言わないことぢやないよ、自分で自分の体をちっとも大事にしないんだからねえ」

怒りと、思いやりを交互に混じえたことばを吐きながら、父が痔ろうのため、点々と落した真赤な血の跡始末をしているのだった。

私も父が、さぞ苦しかったであろうと思われる痔を落した後に出合って、びっくりして入口で立ちすくむ時があった。

余程、悪い時なのであろう、蒲団に腹這いになったまま、暫く、休んでいるが、そうした時でもたいていは、飲みに行ってしまうのだった。

この頃、他の白い洗濯物に混じって、見なれない黒い大きな女物のブルマーが干してあるのをよく見た。（祖母が嫌がる父に汚ごすからと無理にはかせていたのだった）

祖母の父に対する世話焼きは、その底に深い愛情があったので、父もたいていのうるさい叱言は、聞き流しているのだと思った、けれど、私に対しては、あまり愛情があるとは思えなかった。

感じやすい年頃の私には、祖母のちょっとした冷めたい言葉も、すっかり読み取ってしまい、目の前が、真暗になるほど悲しむ時が多かった。

こうした父のいない夕餉には、特に祖母は機嫌が悪く、血圧の高くなるのを避けて、野菜ばかりの不味い食事をつつきながら、

「洋服は、制服一着あれば充分ですよ」

と、前からの私の要求にまるで取合ってくれなかった。

紺サージのジャンパースカートの上に、野暮ったい紺の上衣を着ている私は、家にいる時位、自由な服装がしたかった。

「だって、郁子さんだって着ているし、私も一枚位ほしいわ」

両親の揃った、暖い家庭の雰囲気のなかでのびのびと自由な服を着ている友達の姿を浮べながら言った。

不服そうな私のようすを見ると、祖母は、持った茶碗をお膳に置き直し、今までより強い語調で、

「母親もいないのに、母親のいる娘の真似をするなんて、とんでもないよ」

と、言ったかと思うと、

〃お前は、普通の子と違う人だから、何でも控目に、つつましくしていなくてはいけない〃と、子供の時から聞かされている、身を切るような言葉を、また聞かなくてはならなかった。

下を向いて、じっと歯を喰いしばっていると、白いごはん粒の上に、ポタッ、ポタッと涙がおちた。

砂を噛むような食事を済ませて、私は部屋に籠り、祖母に心の中で激しく拗ねていた。

梟のような鳥の声が、すぐ近くの森でした。もう家の中も、すっかり静かになって、祖母のいる部屋からは、聞き馴れた鼾が聞えていた。

虚ろな鳥の鳴き声は、だんだん不吉の予感となって私の胸を騒がしはじめた。

父になにかあったのでは？　そう思いだすと、私は部屋の戸を開けて、祖母に気付かれないように廊下を通り抜け、茶の間を手さぐりで歩き、そして玄関に出た。お手洗の入口に並んでいるスイッチをつけ、何気なく足元を見ると、夕方祖母が拭き残した真赤な血が一滴残っているのを見た。一瞬、まるで変り果てた父の姿をみたような錯覚にとらわれると吊してあるオーバーを肩にかけて、急いで外に出た。

冷めたい星空に寒い北風が強く、闇に私の吐く息が、白い霧になっては、すぐ消えていった。

大きな家ばかりが不気味に続いて、すっか

り寝静まった代田の夜道に私の足音だけが、異様にカン高く響いた。

黒々とした家の続きから、つと左に曲り、墓地の横の細いじめじめした道を、恐ろしさに息もつかずに通り抜け、見上げる程高い石垣の続く道に出た。

ふと、かなり向うの曲り角の、ぼんやり灯っている街燈の下に、黒い人間の影らしいものが浮き出されているのを見た。

こちらに近づいてくる気配もない黒い影は佇んでいるのでもなく、また歩いているようにも見えなかった。

息をつめて私が近づくにつれてその影は、紛れもない父の姿だと判った。

冷たい風を背に受けて、擦減った二重廻しの裾は、ぱたっ、ぱたっと、骨ばかりの父の身体をいやというほど、打ちつけていた。

ぐんにやりとした古ぼけたソフトは、父の目まで隠して、長く垂れ下った少ない髪の毛が、泥酔して眠った顔に半分もかかっていた。

街燈の下に何やら佇んだまま、いつまでも動こうとしないのだった。

私は父の傍へ黙って近づいた。しかし父は私に気がついたようにもなく、夜目にさえ酒焼と疲れがわかる顔をこちらに上げようともしない。

「早く帰りましょうよ！」思いきって父の肩の骨の辺りをゆすぶるようにして言うと、瞬間、大きく瞳孔を見開くようにして私を見て〃なんだ葉子か、それなら安心したよ〃いうふうに、またすぐに、とろんとした眼をすると、やっと思い出したように、一、二歩ふらふらっと歩き初めた。

よろけながら、つつかかりながら、歩いては止り、右へ二三歩、左へ二三歩じぐざぐのように歩き、そして今にも前のめりに石に躓ずき、ころびそうになりながら、やっとこころばないで歩く。

私は、父のこんなに正体もなく酔っているのを見るのが、やりきれなかった。

祖母が、あまりうるさく叱言を言うので、父をこんなに苦しめているのだと思った。

何か言って父を慰めたいと思った。

しかし私の思いは、言葉にならなかった。そして不意に夕食の時に祖母に言われた悲しい言葉が、胸につかえてきた。

〃おばあさまはお父様がいない時に、ひどいことを言うの！

心の中で、繰り返して私は酔った父に呼びかけていた。

見ると、あみだにかぶったソフトから覗いている父の横顔は、まるで死人のように土色をしていた。

すっかり型の頽れた二重廻しに、女物のペシャンコの下駄を履いている痩せこけた足元には、ゆたんぽの火傷に巻いた汚れた繃帯がだらしなく解けて、歩くたびに踏まれていた。

私は黙ったまま、父の酔った歩調に合せて、とぼとぼと足を運ぶと、電柱の灯の下に二つの影は細長く、でこぼこの石ころだらけの道に揺れていた。

時計が二時を打つ音に、うとうとしていた私は、二階のせまい寝室で寝ている父が、まだ眠らないのか、食器のふれ合う鈍い音が、夜の家の静かさを破っているのに気づいた。

お腹を空かした父が、蒲団の上に腹這いになって、祖母が父の枕元に用意しておいた、おむすびを食べているのに違いなかった。

「おむすびは、おっかさんに限るよ、若い女の作ったのは嫌だからなあ」と、笑いながら、しかも神経質にこの間も言った父だった。

骨ばった長い五本の指で白いおむすびを、無器用に持って食べている父を私は想像しながら、さっき父に言いそびれた祖母のことを静かに考えていた。

昭和十年代

田中克己

「このごろ死者といる時間の方が多い」と書いてよこしたのは、伊東静雄だったが、私もそう思うことがある。皆やさしくいい人ばかりだったように思へる、それらの死者の中でまた一等なつかしいのは朔太郎先生である。

「僕は先生じゃないよ」と云はれたこともあり、萩原さんと云い直さねばならないかと思うが、その萩原さんを識ることは、私は大変おそかった。

はじめてお会いしたのが、昭和十一年、萩原さんが大阪へお越しになった時で、心斎橋筋の喫茶店の階上での歓迎会があり、伊東、小高根二郎などの仲好しと集ったが、萩原さんは、伊東が私を紹介すると、上目づかいをしてごらんになったままでろくすっぽ物もいはれず、とっつきにくい人だなと思った。なに向うでも、同じ感じをもたれたかもしれない。（先生の厭人癖、とりわけ初対面でこはがられるくせのあることはのちになって私も知った）当時、私は大阪の中学の教師で、学校を出て二年目、何もわからないくせに生意気一方だったことはこのごろになってつくづく思い当る。

「四季」が出たのが昭和九年、私が学校を卒業した年の秋だった。私は一号から読んでいるが、萩原さんは毎号お書きである。私は十一年の初めかに堀辰雄さんから御丁寧な手紙をいただいて、同人に加えてもらったが、萩原さんがこの時、同時に同人になられたことはおかしなことで、堀、三好、丸山、津村立原の五人の同人以上に、その前から熱心に書いておられたのである。

その書かれるものが私にはそのころ感心の種にならなかった。たとえば「純正自由詩論」と題して、「学校は卒業したがどうしても食えないと言う社会を知った」という歌？を丁寧に詩でないと批評されるのである。生意気な私には、大詩人がこんなものを相手にして一生懸命になられること自体が馬鹿らしく、萩原さんて馬鹿じゃないかと思うことさえあった。

私はこの日の二次会に案内する伊東らと別れて、疲れて帰宅した。あとで伊東に会って聞くと、伊東は萩原さんを新世界の温泉に案内し、御一緒に入浴した。萩原さんは意外にもいい体をしておられたので、伊東は「いやらしくてならなかった」。伊東静雄は私同様の痩せっぽちで、その劣等感をこんな風に表現した。私はそれ見ろと甚だ得意になったことをおぼえている。

大体この昭和十一年という年は萩原さんの一等御元気だった年である。

「昭和十一年という年は僕にとって非常にあわただしく忙がしい年であった。この一年の間に、僕は単行本を五冊も書いて出版している。そしてその間、旅行を前後五回もした」と御自身でも書いておられる。旅行の四度目が御親戚の病気見舞で大阪に来られたのである。出版された単行本五冊はいまの私には全部あげられないが、「郷愁の詩人与謝蕪村」だけはおぼえている。詩人でなければ書けない、蕪村のよき理解を示すと同時に、蕪村と同じくロマンチックな御自身の詩情を明らかにする本で、いまでは文庫にも入っている。しかし私はこの本さえも読まなかった。

翌年、私は夏休みに上京した。妻子を妻の

実家において、三好達治さんと信州にいく、追分の油屋に滞在中の堀辰雄さんを訪ねるためである。堀さん、立原道造などとは、この時が初対面であったのだが、そのことは略する。車中、三好さんは「きみ萩原さんの詩をどう思う」と訊ねられる。私は答えた「読んだことがない」その時の三好さんの驚いた顔は今でもおぼえている。その顔で三好さんは何度もいった「そんな詩人があったか」

実際、萩原さんの詩はそのときまで、いやその後もしばらく読まなかった。犀星、春夫は愛誦した。その他の詩人の作品もおおむね識っている。それなのに私は朔太郎だけは一度もよまなかったのである。「詩集氷島」が出たのは、昭和十年のことである。朔太郎の最大の理解者と考える三好達治は、この詩集を非難した、と私にはとられる文章を書いた。私は安心して読まないですませたのである。三好さんの文章はいまから思えば、「氷島」が「純情小曲集」よりはよくないといっているにすぎない。しかし私はこの「純情小曲集」への三好さんの傾倒を知らないから、「氷島」をつまらない詩集だと思いこんでしまったのである。

三好さん以外の連中は、もっとわかり易く萩原さんの本や作品の悪口を教える。黙殺という、悪口よりさらに冷酷なやり方のあることを知らない私は、萩原さんくらい評判の悪い人はないのだなと思いこむ。その中で、萩原さんの本はどしどし出版される。私にとってはふしぎなことであった。

こういう疑問を解いてくれることになったのが、私の上京だった。昭和十三年、私は四年半つとめた大阪の中学をやめ、妻子をつれて上京した。

このころの日記が残っていて（それを私はこのごろ見つけ出した）「四季」の人たちにだんだんしりあいになっていく様をしるしているが、萩原さん関係では

（昭和十三年）九月十七日（土）コギトの会、定刻H・N来るもU・O来らず、一時間してY来る。その間萩原朔太郎氏颯々と眼下の道をゆくを見る…。

がはじめである。この会はしるしてないが新宿の高野フルーツパーラーあたりだったかと思う。「颯々と」はわれながら可笑しな表現をしたものである。

九月二十三日（金）……六時より四季の会三好氏宇野千代とあひ、紹介せらる。美人なり。詩集（「西康省」）を神西、津村、神保、丸山、阪本、日下部、三好の七氏に贈る。室生、萩原両先生も来会。萩原さん…

…くだを巻く……

私ははじめて萩原さんの酔態を見て、たぶん眼を丸くしているのである。この会も会場が書いてないが、銀座のたしか中国料理店だった。

九月二十四日（土）……Kを訪ね帰宅……

途上萩原先生夫妻来り、先生近よればそっぽ向く。

先生に厭人癖のあったことは前にもいった。このとき新婚の先生は、見おぼえはあるが、名もおもい出せない私の話しかけるのをこはがって、よこを向かれたに相違ない。

十月十六日（日）保田（与重郎）の結婚被露宴。H夫人を誘いゆく。来会者佐藤春夫萩原朔太郎、倉田百三、中河与一、同幹子川端康成、林房雄夫人……

萩原さんは、この時テーブルスピーチをやられたにちがいないが、何をいはれたかはおぼえてない、披露宴の場所は東京会館であった。

十月二十四日（月）……津村信夫を訪れて「軍艦茉莉」を借る。連立ちて丸山薫氏を訪う。萩原さん中野に転居せし由。……

丸山、津村両氏と萩原さんの噂をしているのである。中野のお宅はおぼえがないが、新築の代田のお宅から一時出られたと見える。ちょうど一月前、偶然途で先生にお会いしたのはこの御転宅のおかげであったことがわかる。

明けて十四年となると

二月八日（水）中原中也賞の詮衡にいく。立原に贈らんとのことときまる。……われを推薦せし人、井伏、中河、萩原、安西、竹中、吉田一穂の六氏。

私はやっと萩原さんに作品をよんでもらうことができたのである。しかし私はまだ萩原さんの詩をよんでいない。

二月十一日（土）……夜草野心平の「蛙」出版記念会にゆく。……会後、萩原さんを囲み、保田、山岸、高橋新吉と話す。

この時の会場や話の内容は、ともにおぼえていない。

そんなわけで、私は昭和十四年まで先生を識っていたとは、冗談にもいえないのだが、東京に住まったおかげで、移住一年後にやっと機会が出来た。

ただ私にとって残念なことには、ここから私は日記をずいぶん永くつけなくなっているので、うろおぼえばかりであるが、萩原さんの発意で、パノンの会が出来た。明大や文化学院で講じておいでだった「詩と韻文学の本質」というノートを、詩の好きな連中によってもらって訂正したいとの仰せで、「四季」の編集だった日下部君が世話をしてくれた。

「四季」の同人も助講するとのことだったが、私は予定されていなくて、しかも出席して見ると、訂正どころか会員はただ黙って聞き、黙って散会していくのである。大体これが当時の「四季」の詩風にふさはしいといへばいへるが、私は先生に気の毒でたまらないので、質問もしよう訂正もしようと、むりをして出ていく。第一回が七月二日の日曜日、第二回か同月九日、その後、先生が御負傷になって第三回は九月の第三日曜日となった由そのころの「四季」にしるしてある。会場はいまの毎日新聞社、そのころの東京日日新聞社の向いに、帝国農会があって、その地下室のパノンスという喫茶店だった。会員制だったので毎会二三十人出席し、婦人も三、四人はいたかと思う。杉山平一、薬師寺衛など関西の人たちが来たのは第一回と第二回だけだったと思う。みな優しい礼儀正しい無口な人たちだったことだけはおぼえている。

パノンスという喫茶店の名はどういう意味か、いまだに私もわからないが、先生はこの店の名をとって会の名とされた。「スなぞいらないやね」といってパノンの会とされたところなど、私をしてまた眼を円くさせた。講義にもそんなところがあって、終始直観的で前人未踏の理論であったから、反論すればいくらでも出来そうであったが、私は黙った。反駁は詩壇の他の連中にまかせておけばいい。私は萩原さんがまづ好きになり、ついでわかりはじめていたのである。ずいぶんひまと手数がかかり、しかもおそすぎて先生はあと三年しか生きられないのであるが、もとよりその時はそんなことなど気がつかなかった。

朔太郎と短歌

大野　純

たづたづし暗きにおつる身の果をなぐさめ得なば足らむ我幸（「明星」明治36年7月号）

野より今生れける魂をさなくて一人しなければ神もあはれめ（「明星」36年8月）

あめつちを歌にたたへし日も昨日けふは酉の